

# 街路樹

## 蒔かぬ種は生えぬ

～全国学力・学習状況調査結果を受けての指導改善に向けて～



## 実態把握と認識の共有を

～生徒指導～

平成28年10月にいわき市学力向上支援連絡協議会より「全国学力・学習状況調査結果を受けての指導改善資料」が示されました。各教科に関する結果の総括をみると、国語Aでの「書くこと」の領域に課題があることや「言語活動」の充実をより図っていかねばならないことなどが記されています。

また、「児童質問紙」「生徒質問紙」において「課題があると考えられる質問」（全国と比較して下回っているもの）には、「発表や表現力に関すること（小学校）」「言語活動について（中学校）」があげられ、それらを分析すると「みんなの前で発表することに自信がない児童が多く、自分の考えを上手く表現できていないことが分かる（小学校）」「『生徒間での話し合う活動をよく行っていた』と回答している生徒の割合は、調査開始以降増加傾向にあるが、話し合いながら整理して発表するなどの学習に取り組んだ生徒の正答率は高い傾向が見られるので、全国平均に近づけられるよう実施していくべき（中学校）」と明記されています。

質問紙から明確となった児童生徒の課題を踏まえると、各教科の結果も納得のいくものと言えるでしょう。

では、学校の実態はどうなのでしょう。「学校質問紙」の結果を見てみると、いわき市の小中学校共通で全国を大きく下回っている項目がありました。A「学校でテーマを決め、講師を招聘するなどの校内研修を行っていますか。」B「都道府県や市町村の指導主事や大学教員等の専門家が校内研修の指導のために定期的に来校していますか。」です。それぞれの項目で「よくしている」と回答した学校の割合は、全国の3割程度しかないという結果でした（小学校質問A以外）。また、中学校学校質問紙の結果によると研修にかかる質問項目の多くが全国と比べ下回っているという結果も見られました。

この結果を偶然と捉えて、何のアクションも起こさずに今年度を終えますか。それとも課題と捉えて、校内研修を改善しますか。もしも、校内研修を改善したなら、その先には何が見えるのでしょうか。

きっと国語科、算数・数学科だけではなく、全教科において「言語活動」の充実を図っていかねばならないと考える教職員が増加し、個々の教員が授業における自己課題を把握するとともに、組織的に授業力を高めていくことの大切さに教職員全体が気付くのでないのでしょうか。

そして、そういった教職員の増加や校内研修改善の先に、授業改善や児童生徒に今、求められている学力の向上があるのです。

### 「蒔かぬ種は生えぬ」

課題が明確になっている今、このタイミングこそ実践のチャンスです。

平成28年3月に県教育センターから「校内研修改善に向けた4つの提案」が出されました。研修をより協働的に、課題解決的に行うためにぜひ活用してください。そして、授業研究の活性化を図り、個々の授業力UPを目指してください。子どもたち一人一人の花を咲かせるために…。

\*平成28年度全国学力・学習状況調査結果を受けての指導改善資料参照



教育活動の計画立案は、現状に対する問題意識があり、より好ましい状態を実現できるようにと考えて行われているはずですが、しかしながら、その基となるべき現状の実態把握が適切に行われているとは限りません。漠然とした思いや誤った思い込みに基づいてはいないでしょうか。

生徒指導を含む、教育活動の計画立案には、各校で実施しているアンケートや検査を活用し、客観的な実態把握を踏まえておくことが求められています。アンケートや検査を実施する際には、目的に応じて内容が精選されていることや継続的な実施であることなど有効性が高められるよう留意する必要があります。

また、認識の共有には、把握された実態と各教師の抱いてきたイメージをすりあわせることや、取組のたびに、目標は何だったのかを各自が再認識し、点検することが大切です。

各種会議等に全教職員が関わり、話し合いの場を設定することが重要で、その積み重ねが現実の児童生徒の姿を共有することにつながります。

さらに、児童生徒に行っている日々の働きかけが、計画やその前提となっている目標と合致するものになっているかを、各自で随時点検することも認識の共有につながります。

組織においては、実態の把握と認識の共有を図る必要性については、言うまでもありません。教育計画作成の過程から全教職員が関わり、継続的な点検を通して実態の把握や認識の共有を踏まえた積極的な生徒指導を進めていきましょう。

〔参考〕

「国立教育政策研究所生徒指導リーフ」より



## 心のプレゼント

～教育相談室～

1年を静かにふり返る12月。教育相談室にも年の瀬がやってきました。今年も様々な思いを胸に、多くの子どもたちが時には笑顔忘れて、時には心のつながりを求めて、相談室の扉を不安げにそっと叩いてくれました。子どもは誰でも、「こっちを向いて。」とサインを送り続けています。それがどんな形のサインであっても、その姿を受け止め、認め、ほめ、励ましながら、私たち大人の本気な姿を子どもたちに示していくことが大事であると考えています。

子どもたちは私たちのエネルギーの源であり、いつも多くのすばらしいことをプレゼントしてくれています。そんなかけがえのない子どもたちが自分のすばらしさに気づくことができるように、「そんなこともできないの。」ではなく、「大丈夫、あなたならきっとできるよ。待っているからね。」と、何度でも繰り返し寄り添いながら、「自信」という心のプレゼントを、子どもたち一人一人の心に届けていきたいものです。